

# 遠距離介護から見ええてくる「介護」の現場

## パオッコ活動現場より ①

女性タレントが自称古い師に洗脳された件が、度々報道されてきました。家族や関係者によって、コントロールされた気持ちの回復への取組みが行われているようです。両親の尽力は相当なものでしょう。

この報道を見ながら、「家族」についてあらためて考えさせられます。きっと私も自分の子が何者かに心を支配されたなら、何者かでも奪還しようとするのでしよう。恐らく仲のよい友人や善段世話になっている知り合いであっても、同じように助けたい気持ちになるのでしょうが、協力はできても「家族」がリーダーシップをとってこそ、手伝うことができるのかもしれない。

NPO法人パオッコ 〓離れて暮らす親のケアを考える会

太田 差恵子

前置きが長くなりました。パオッコでは月に1回サロンをおこなっていますが、入れ替わりいろいろな方が参加くださいます。「なぜ、参加してくださいのですか」と尋ねると、多くの方は「みんな、どうされているのかと思って」とおっしゃいます。

2月のサロンに参加されたAさん（女性）。故郷で両親とお祖母さまが3人で暮らしておられるそうです。これまでお祖母さまを両親が介護してきました。しかし、最近、介護者であった母親が極度のうつ状態で認知症のような症状になり、父親が自分の母親と妻の介護をしている

状況だそうです。Aさんの母親もすでに70歳なので、高齢者が高齢者を見る。父親の年齢は聞いていませんが恐らく70代でしょう。

Aさんはお祖母さまと母親のことを心配しつつ、父親のことを憂いておられました。このままでは倒れてしまうのではないだろうか。「父はそろそろ限界だと思えます」と話すその瞳に、先を不安視する様子がうかがえます。「私が仕事を辞めて帰るっていうのもね……」とも。

私は差し出がましいことを承知でお祖母さまの施設入居は選択肢にないのか、お聞きしました。するとAさんはとても驚いた表情で「そういう方法もある

のですね」とうなずかれました。まだお若く身近に介護している方が少ないせいでしょうか。施設介護は思いつきもしなかったそうです。

情報が乏しいなか、故郷で妻と老母を必死で支えている父親をなんとかサポートしたかったのでしょう。Aさんにとつて3人とも大切な「家族」です。インターネットで「親・遠距離・介護」と検索し、パオッコをみつけてくださったとのことでした。父親とも話し合い、今後の方策を考えるといつて帰っていかれました。

「介護の社会化」といわれ介護保険がスタートしてから随分年月が流れました。寝たきりや認知症の高齢者の増加、介護期間の長期化など、介護ニーズの増大。その一方で、核家族化の一層の進展など家族をめぐる状況は大きく変化しています。家族にとつて、介護は身体的・精神的にも大きな問題と認識されるようになりました。そして、社会全体で高齢者介護を支える仕

組みとして介護保険制度ができました。

確かに、介護保険制度によって介護を担う家族の負担が軽減されるとともに介護の社会化が進んだことは確かでしょう。

けれども、突然やってくる「介護」とどのように向きあえはいいのか分からず、戸惑ってしまったり、家族だけで抱え込んだりするケースが無くなったわけでもありません。施設介護を望んでも、需要と供給のバランスが悪く、すぐには入居できない場合が多いのも現状です。

そして、やはり「家族」がリーダーシップをとらなければなりません。

介護保険が始まる時、「利用者本位」という言葉もたびたびいわれていました。

利用者の選択により、多様な主体から保健医療サービス、福祉サービスを総合的に受けられる。この「利用者本位」は耳障りのよい言葉です。けれども、実際には「利用者本位」とはなりにくいと思えます。

要介護者とは、65歳以上の者で（40歳以上65歳未満でも、「要介護状態」になる原因が特定疾患の者を含む）「身体上又は精神上の障害があるために、入浴、排せつ、食事等の日常生活における基本的な動作の全部又は一部について、厚生労働省令で定める期間にわたり継続して、常時介護を要すると見込まれる状態」を意味します。

このような状態の高齢者が、自身のニーズを把握し、しかも契約という行為をすることは難しいと言わざるをえません。現

実は、家族の出番です。同居の配偶者や子がいる場合は、その者が担うことが多く、同居の家族がいけないケースでは、別居の子や親族となることが一般的です。家族、親族が方向性を考え、そこにケアマネジャーなどの専門職にアドバイスなどを求め、介護の方策を練っていくこととなります。

前述のAさんも、方向性を考えるために、パオッコのサロンに参加されたのだと思います。「キーパーソン」ともいえそうです。

介護のキーパーソンという点、以前インタビューした別の50代Bさん（女性）を思い出します。親御さんは寝たきりになり、病院を転々とされていました。看病疲れからBさんも肺炎となり入院を勧められます。しかし、入院せず、親の看護を続けました。親本人が「C病院にだけは絶対に戻りたくない」と言っておられたからです。

でも、親御さんはそれを入院中の病院のスタッフに訴えるだ

けの体力は持ち合わせていない。しかし、病院側では、C病院への転院で話が進められていたそうです。Bさんは「私があきらめたら、あれだけ嫌がっているC病院に移ることになってしまう」という思いから頑張っておられるのでした。

自称古い師からの奪還にしろ、病院の選択にしろ、本人が弱い立場に陥っている場合、「家族」の存在、家族の姿勢によって、本人の人生は大きく変わってくるものだと思います。

とはいえ、「家族」だからといって、何でもかんでもできるわけではありません。頑張りすぎる、Aさんの母親のように介護でうつ状態に陥ることもありま。Bさんは根性で入院せず肺炎と闘い幸いに自力で回復されましたが、さらなる状況悪化を招いた可能性も否めません。「家族」のいない人も増えています。それでもやっぱり何か問題が生じたときのキーパーソンは、「家族」になるのだな、と考えさせられます。

NPO法人パオッコ

### 〓離れて暮らす親のケアを考える会〓

親世代はできることなら生涯、住み慣れた家で住まい続けたいと望み、子世代も仕事や子どもの教育などを考えると、故郷に戻ることは容易ではありません。そんな状況のなか、親の心身に衰えが生じると子世代はどうしたものかと悩みます。パオッコは「ひとりの経験はきっとみんなの役に立つ」という理念のもと、情報や体験を共有。ぜひ、ホームページに遊びにきてください！

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-37-8  
本郷春木町ビル9F インキュベーションハウス内  
ホームページ <http://paokko.org>